

---

## Ⅱ. 各国パネリストからの報告 & ゲスト・コメント





## ●一人っ子政策と家族と子ども)))

下 立強 (中国)

私は日本の教育に非常に興味を持っており  
ます。1979年から1982年にかけて、3回にわ  
たって日本にまいりまして、日本の教育界を  
視察させていただきました。日本の教育は非  
常に成功していると思います。

日本の教育と中国の教育を比較すると、か  
なりの相違点がみられます。1つには、日本  
の教育は主に普及系といえますが、中国の教  
育はエリート系です。中国には科挙という制  
度があり、勉強をするのは将来この科挙にバ  
スするため、つまり高官になるためといっ  
ても言い過ぎではないでしょう。しかし日本  
では、大学を卒業しても家庭に入って専業主婦

になる人もいと聞いています。これは中国  
人からみれば大変理解に苦しむことです。中  
国では大学を卒業したら、必ず出世し、幹部  
や技術者になります。つまり中国の教育は、  
エリートを養成するための教育ですが、日本  
は社会人としての教養を身につけるための教  
育です。しかし最近の中国では、日本のよう  
な傾向がでてきたことも事実です。

もう1つは、中国は主に国家が教育の主導  
権を持っているということです。したがって  
中国には私立大学はありません。反面、日本  
の教育は民間が非常に力を持ち、その面での  
教育が非常に発達しているという印象を受け

ます。私は以前、早稲田大学に滞在したことがあります。日本の私学は非常にレベルが高いと思いました。また日本は、小学校とか中学校など、いわゆる初等学校が非常に普及しています。これは日本の伝統であり、日本の教育レベルは江戸時代から、全世界的にみてもおそらくナンバーワンだと思います。中国の国家は、小学校は義務教育と決めましたが、しかし文盲率はまだ30%くらいあります。

日本の経済は、今日まで素晴らしい発展を遂げてまいりましたが、このことも教育の普及と非常に関係があると思います。

本日は、日本ばかりでなく、韓国やアメリカ、イギリスなどを比較調査した結果についてのシンポジウムですが、私は勉強させていただくつもりで、ここへ出席させていただきました。アメリカをはじめイギリス、そして韓国の方たちからいろいろ勉強させていただきたいと思います。

それでは本題に入ります。中国の教育、いわゆる児童教育についてお話しさせていただきます。今からお話しすることはあくまで私個人の見方です。そんなに理屈はありません。中国で40年近く教鞭をとってまいりまして、これまで小学生や中学生を教えてきましたから、そうした経験を通して、中国の教育事情について意見を述べさせていただきます。皆さんのご参考になればと思います。

中国の児童教育の一番大きなポイントは、やはり一人っ子問題です。今回の調査報告書は、こうした中国の特徴を反映していると思います。皆さんがこの報告書を見るときは、中国の一人っ子の家庭、あるいは家族の構造、そしてそれに伴う児童教育などを頭の中に入れておいてほしいと思います。

日本に来る前に少し参考資料を見ました。ある統計によりますと、今の中国では0歳から6歳までの95%が一人っ子だといわれています。このままでいけば今世紀末までに、中国の青少年のおそらく100%が一人っ子になるでしょう。

こうした中国における一人っ子問題は非常に大きなテーマであり、その研究過程で意見が2つに分かれています。1つは一人っ子に対して、特殊性を認めるか認めないかということです。一部の学者は、一人っ子は特殊性はなく、普通の子どもと同じだといっています。しかしもう一方の意見は特殊性があるというものです。中国は強制的に、一人っ子政策を進めていますから、すべての家庭が一人っ子です。これはもちろん全世界にも例がありません。歴史からみても今までもないし、これからもおそらくないでしょう。

そして一部の学者は、一人っ子はむしろいろいろな優れた点があると指摘しています。家庭は割合に余裕があり、経済力は豊か、また体は健康だし、栄養たっぷりの食事をとりますから、皆頭がいい、そして知力が非常に発達しているなど、つまり優れた点をたくさん強調しています。しかし一部の学者は、例えば一人っ子はわがままだとか、いろいろな欠点があるといっています。

私個人の見方は、中国の一人っ子は確かに特殊性があり、これを認めないと中国のこれからの一人っ子教育にはよくないと思っています。

では、中国の一人っ子の特殊性はどこにあるのでしょうか。中国の家族構造は、いわゆる「4・2・1」です。4というのは4人の年寄り、父と母の父母（中国では外の祖父とか祖母、内の祖父、祖母といいますが）、これらの（子どもからみた）祖父母が4人です。そして、2は両親の2人、1は子ども1人を指します。つまりおとな6人に対して子どもは1人ですから、子どもは大事に大事に育てられます。

中国には、一人っ子に対して、「小皇帝」（「小太陽」）というあだながあります。日本語では「小さい天皇」といったところでしょうか。小さい太陽ですから、家族はこの太陽の周囲をまわっている。もちろん中国の一人っ子のすべてが小さい皇帝や小さい太陽ではありませんが、しかしこういう傾向がかなりあ



るということはいえるでしょう。こうしたことは、中国の家庭に行けばすぐわかります。

中国は今、経済的にはそれほど発達していません。いわゆる先進国に比べ、商品もそれほど豊富ではありませんし、住まい状況もまだです。しかし中国の子どもたちは、現状にみんな満足しています。家庭の雰囲気もいいと思います。特に開放・改革政策をとってから、みんなが生き生きしていますし、おとなはこぞって子どもの世話をしています。はっきりいえば、中国では過期待、過保護の子どもたちが、多かれ少なかれ存在しています。中国には「多子多福」という伝統がありますが、しかし今は、子どもは1人です。それだけに子どもは親から非常に期待されており、「えらい人になりなさい」「金持ちや有名人になりなさい」と言われ続けているのです。

これは上海の5万人を対象にした調査ですが、「技術者になりたい」子は52.9%、「医者」が22.1%、「幹部」5.9%、しかし「労働者」あるいは「学校の先生」には、ほとんどなりたくないという結果が出ています。中国では小学校の先生は貧しいし地位も低いのです。

一人っ子の家庭には、政府が特別に手当てを出しますから経済的には豊かです。調査によりますと、80%の一人っ子は毎朝、牛乳を飲んだり卵を食べています。一方、非一人っ子のおよそ30%は、こういう待遇がありません。また、別のデータによりますと、毎月の小遣いは53元～120元です。これは、何年か前の調査データですし、普通の労働者の給料は200元くらいですから、当時の120元という子どもの小遣いは大変な額です。

最近私が聞いたところによると、中国はい

わゆる貴族の学校をつくりました。つまり、全寮制の近代設備を整えた、年間何万元という学校です。こうした状況の中でのこれからの中国の一人っ子は、潜在的な危険性をはらんでいることも指摘しておきたいと思います。特に、挫折があると非常にがっかりします。最近では、試験に不合格になった子どもが自殺するケースも出ているのです。

中国の一人っ子政策は、人口増加のスピード化によって生まれた止むを得ない政策だと思います。中国の人口は、中華人民共和国が誕生するまでの107年間で1億人も増加しました。また中華人民共和国が成立してから今日まで、7億人も増えているのです。そこで人口増加を緩和するために一人っ子政策は止むを得ず行われているわけですが、しかし率直に言って、いろいろな副作用があることも否定できないでしょう。例えば、教育の問題です。先ほども申し上げましたが、中国の一部の学者は、一人っ子は問題がなく、優れた面ばかりを強調しています。

しかし一方で、一人っ子政策は児童教育の面ばかりでなく、社会的にも問題を内包しており、関連した事件も起きています。最近の例では、北京で銃の乱射事件がありましたが、これは2人目の子どもを中絶した奥さんが手術の失敗で死んでしまい、取り乱した夫の軍人が上官を銃殺してしまったという痛ましい事件です。

また、男女の人口比をみると、女性が多くアンバランスです。さらに、高齢化の問題もあります。

このようにいろいろな問題がありますが、現状を考えると、一人っ子政策も止むを得ないのではないかという気がします。

## ●データにみる韓国の子どもたち))

李 貴胤 (韓国)

今回の国際比較調査は未知の領域、すなわち子どもと家族、そして親子関係、さらに性差の問題と、いろいろな問題を扱っています。また、この報告書で調査者は、ソウルの社会的雰囲気について2つの問題をクローズアップさせています。

まず1つは、専業主婦の多いこと。そして第2は、入試競争の激しさをあげています。韓国では、専業主婦が多いということについては普通の人たちにとって、あまり大きな関心事ではありません。これは昔からの伝統的な社会的雰囲気であるからです。

むしろ現在、大きな社会的問題とされているのは入試競争の激しさです。このように入試競争が激しくなった理由は、どこの国も同じだと思いますが、教育熱が非常に高いこと、そして韓国特有の理由として、今まで歴史的に韓国は教育機会が全ての国民に与えられていなかったことなどがあげられるでしょう。

報告書は日本に比べて韓国には、いまだに儒教的な文化がたくさん残っていると指摘していますが、私もその通りだと思います。

今回のデータによりますと、韓国の多くの家庭は子どもが2人ですが、最近は一入っ子の家庭も結構増えています。特に韓国は男の子を大事にする思想が強いので、子どもが1人だけの家庭は、ほとんどが男の子です。例えば、ソウルの小学校へ行って、低学年の教室に入ってみますと、男の子と女の子がベアを組んで座っていますが、男の子があぶれて男の子だけで座っているケースも結構増えています。つまり、男の子の割合が女の子よりも非常に高いということです。

朝食について、韓国では朝ご飯を抜いて学

校へ行く児童が多いという結果が出ていますが、私がある理由を調べてみたら、第1に「時間がないから」、2つ目が「食欲がないから」という理由でした。

また、子どもたちの自分自身に対しての考え方についてですが、東京とソウルの子どもたちは、他の都市の子どもたちに比べて比較的暗い自我像をみせています。東京の子どもたちに関しては、私はよくわかりませんが、ソウルの子どもたちにとって一番心配なことは、試験とか学校の成績、それから中学への進学、つまり勉強に対する心配です。そのために子どもたちが明るくないのだと思います。

表13「結婚後、親とどれくらい離れて住みたいか」については、伝統的な価値観を持っている世代から見ると、大変うれしい結果だと思います。また表14「親が老後、歩けなくなったらどうするか」の結果からは、おとなとか両親を尊敬する気持ちがうかがわれ、いまだに韓国には儒教文化の影響が強く残っているということがわかります。

次に性差について申し上げます。「お母さんがいないとき、誰がご飯を作るか」という質問に対して、多くのソウルの子どもたちは自分自身が作るかと答えています。「お父さんが作る」という答えが少ないのをみると、韓国では家父長制度下の価値観がそのまま残っているということでしょうか。

表15、表16では子どもたちの将来に対する職業観をみせてくれますが、ソウルの男の子たちは、自分の配偶者が職業を持たないことを願っております。このような数値は、韓国社会が他の外国に比べて専業主婦が多いことを物語っています。



さらに、結婚したら「食事の準備は誰がするか」について、男子の場合、家事だけはちゃんと女性がやらなければならないと思っているという結果です。これは男性に、いまだに男尊女卑思想が残っているからだと思われます。しかしこのような傾向は、若い世代にはだんだん少なくなっているということを示し添えておきます。

さて、今回のシンポジウムは、おとなと子どもの価値観の差異だと聞きましたので、梨花女子大の父母にいろいろと質問をしてみま

した。

1つは、今の子どもの特徴は何かということです。もう1つは、親の子ども時代と今の時代はどのように違うかということです。

このような質問に対して、このごろの子どもたちは「自己主張が強い、口答えをする、礼儀を知らない、おとなを尊敬しない、注意が散漫、物を大事にしない」などがあげられました。これらを総合してみますと、今の子どもたちの特徴は、利己的価値観が強すぎる、つまり自己中心的すぎるということだと思

表13 結婚後、親とどれくらい離れて住みたいか

(%)

	東京	上海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
同じ家	22.7	36.1	45.9	4.9	4.9
隣の家	18.6	52.4	29.5	7.5	11.6
車で30分以内の所	43.4	10.5	20.1	58.5	60.7
親の家の近くでなくていい	15.3	1.0	4.5	29.1	22.8

表14 親が老後、歩けなくなったらどうするか

(%)

	東京	上海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
老人ホームに入れる	24.1	0.9	0.4	25.8	19.2
近くの家で世話をする	21.8	15.1	23.4	46.2	47.0
自分の家で世話をする	54.1	84.0	76.2	28.0	33.8

ます。

2つ目の質問で、今、子どもたちに気を使っていることは何かということについて、まず「勉強」、次に「健康」と答えてくれました。つまり、勉強さえしていればよいという考えの親が多いようですが、これは韓国の伝統的な儒教の思想の崩壊を現していると思います。

子どもたちには、「このごろ一番心配なことは何か」と質問しました。子どもたちは、「学校の成績」「試験の点数」「進学後の勉

強」だと答えています。すなわち90%以上の子どもたちは、勉強について心配しているということです。

以上をまとめてみますと、韓国社会ではおとなによる子どもへの勉強の強制と、それによって子どもの育ち方に歪みが生じるなどの問題が懸念されています。つまり、高学歴者が厚遇される反面、伝統的な価値観が崩れていくということです。

表15 女子の理想の生き方（女子のみ）

(%)

	専業主婦	共働き	ディンクス	わからない
東京	36.4	16.6	1.9	45.1
上海	1.8	62.1	3.0	33.1
ソウル	25.5	34.3	8.9	31.3
ロンドン	8.4	44.4	8.0	39.2
ニューヨーク	7.6	47.5	2.5	42.4

表16 女子への希望（男子のみ）

(%)

	専業主婦	共働き	ディンクス	わからない
東京	39.0	15.7	1.2	44.1
上海	6.2	56.0	0.3	37.5
ソウル	53.5	17.8	2.8	25.9
ロンドン	12.9	40.8	9.0	37.3
ニューヨーク	14.7	37.6	3.5	44.2

## ●家族の危機か、変化か)))

エイドリアン・ファナム (イギリス)

英国には一般的に、家族について2つの見方があると思います。まず1つは家族の危機という見方です。これは家族が解体しているなど、いわゆる悲劇的な見方です。もう1つは家族の変化という捉え方です。

まず、家族の危機という言い方をする人は例えば離婚率が高いとか、幼児虐待、非行、学校の暴力、さらには麻薬等の問題をよく引き合いに出すわけです。

それに対して、家族の変化を指摘する人は例えば働く女性が増加している、片親の家庭が増えている、子どもの独立心が高くなっているなどという言い方をします。

今回のような国際比較調査がなされますと何が事実で、何が事実でないのかということがはっきりいたしますし、本当の比較ができます。いろいろなデータを見せていただきましたが、多くの場面でやはり東西の違いというのがはっきり出ていると思います。その中でロンドンとニューヨークは、具体的なところや細かい部分での違いはありますが、大雑把にあって似ていると思いました。

また、このような調査というものは、子どもたちによっては、社会的にあるいは文化的に模範的な回答をしたいという部分があるのではないかと思います。ですから自分で思ったことよりも、社会的にこういうのがいいからという答えを出してくることもあるでしょう。例えば、「家族の評価」についての結果がそうではないかと思いますが、社会的にこの年代の子どもというのは何が望ましいのかということに大変敏感で、こういう答えをどうしてもしてしまうのです。また「子どもの自己像」についてですが、これも私は大変興

味を持ちました。自分に対するイメージ、いわゆる自己像について、特にアメリカの子どもたちが非常に肯定的な自己像を持っています。それに対して日本の子どもたちは自分に対するイメージが非常に低いということに驚きました。英国はちょうど、その中間に位置しているようです。その結果といいますか、こういうデータが出たということは、教育あるいは社会の傾向の結果として出てきているのではないかと思います。

アメリカは自尊心とか、自分に対する自信が持てるということに大変重きがおかれる社会です。その点、日本は謙虚さということが大事にされる社会、つまり個人的な見栄というのは捨てるという社会ではないかと思うわけです。そして、やはりこの2つの間に位置するのが、英国ではないかと思います。

さて、表17を見ていただきますと、イギリスの子どもは、「仕事で成功すると思うか」という質問に対して、「きっと成功する」は20%にも満たないという結果です。これはちょっとショックな数字です。警告を寄せられたような気分です。

このように、脱物質社会といいますが、物質社会の後の社会におきましては、若者たちは職業倫理を失ってきている、あるいは企業への願望というのがなくなってきています。いわゆる経済的には満たされている状態であるということではないかと思います。イギリスでは経済的にもだんだんと停滞してきているというような問題もありますし、金持ちになりたいという希望が、それほど強くないのではないかという気がします。

次に親子関係についてですが、英国の子ど



もはいかに自立したいかということ、あるいは自分を自立した個人であると考えているかということが、今回のデータに反映されているように思います。ただ、これも英国におきましては階級の違いがあり、中流家庭ですと非常に小さい頃から自立させるようにしつけていきます。やはり自分で、自力でできるようになるということが健全で、適用性が高いと考えられます。経済的にも、教育的にも、成功するためには自立心が重要だというしつけがなされます。

一方、労働者階級になりますと、子どもにそれほど厳しくありません。むしろ子どもを放任しておくという傾向があり、そのためでしょうか、子どもは早く自立するようです。イギリスの中流家庭ではだいたい6歳くらいからお小遣いをあげるようになります。毎週お小遣いをあげます。そして年齢が高くなると、月に1度のお小遣いになります。そして12歳くらいになりますと、ほとんどの中流家庭の子どもは自分の口座を設けます。そして

自分でお金を運営していくようになります。労働者階級の子どもたちは、中流家庭の子どもたちよりお小遣いが多いようです。しかも、決まってもらうというよりは、なくなる親がすぐくれるというような状態です。つまり、中流家庭においてはしっかり予算があって、自分のお小遣いを運営させる。そういう形にして、子どもを自立させるのではないかと思います。

やはり、東西の最大の違いというのは、個人主義対集団主義、あるいは集団指向、その辺に違いがあると思います。西洋社会においては、個人主義あるいは自立ということに重きがおかれます。それに対して東洋は、家族あるいは相互依存性を重んじる社会ではないかと思います。日本から私は、相互依存性、つまりお互いが協力し合うということを学びました。それは東京では、自然に備わっていることではないかと思います。

性差に関する問題がありますが、これは英米で大変似ていると思います。私たちの子ども

表17 どんなおとなになれそうか

(%)

		東京	上海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
家庭的達成	皆から好かれる人になる	7.6	47.5	20.5	10.7	16.2
	よい父(母)になる	18.4	64.3	57.2	47.2	66.0
	幸せな家庭を作る	34.7	58.7	66.8	53.8	70.3
	肯定率平均	20.2	56.8	48.2	37.2	50.8
社会的達成	有名な人になる	7.9	9.6	15.6	14.3	14.9
	お金持ちになる	7.6	15.7	15.2	17.2	18.1
	仕事で成功する	15.9	37.5	40.2	17.2	31.9
	肯定率平均	10.5	20.9	23.7	16.2	21.6

「きっとそうなる」割合

もは結婚を肯定的に捉え、それから共働きを期待しているようです。また家事を共有すると捉えているようです。つまり、男女はより平等になってきているということがいえるのではないのでしょうか。

英国において、このように男女がより平等になってきているのは、思想的というよりは経済的な背景から、どちらかというの家計をうまくやりくりするために、男女がより平等に働かなければならないということだと思えます。英国におきましては、例えば働く女性として女王がそうですし、前首相も女性だったわけです。ですから非常に地位の高い女性が増えてきておりますし、若い人にとっても働く女性は当然だというような考え方が出てきているようです。また、新しい仕事も創出されておりますが、男性というより女性がそうした新しい仕事を獲得することが多いようです。

また教育願望も特に女性が変わってきています。私は、医大生にもよく教えておりますけれど、男性よりも女性の方が多くいます。事実、英国では男性の医者より女医の方

が多いのではないのでしょうか。医者に限らず多くの分野で男女平等だったのが、今は女性の方が多という事業所もかなり増えてきています。ですから、この年齢の子どもの母親が働いているということはよくあることであり、父親が失業して働いていないというケースもかなりあります。したがって、今回の結果のような違いが出てきているのではないかと思います。

依存心と独立心に関連して、今回の調査結果で注目したいのは、イギリスでは将来親との同居を望む子が5%しかいないということです。子どもが早く家を離れてしまうと、家族への愛着が少なくなり、家族の解体へとつながるのではないかと危惧します。もっとも私自身は楽観主義者でありますから、将来は明るいのではないかと考えています。確かに私の世代と比べれば、これからの子どもは多くの変化やストレスに直面すると思います。しかし、教育レベルも知識のレベルも私の年代より高くなっています。ですから、いわゆる家族の変化ということに関しては私自身、肯定的に捉えております。





## ●子どもにとっての家族の役割))

チャロル・シェークシャフト (アメリカ)

アメリカの家族についてお話しする前に、ちょっと申し上げておきたいことがあります。まず今回の国際比較調査のデータの意味合いに大変興味を持ちました。それぞれの結果が、それぞれの国においてどのような意味をなすのかを理解することが必要ではないかと思えます。1つの国においてこうだからといって、他の国においても同じような意味を持つかという、必ずしもそうではないと思えます。やはりそれぞれの国の、文化というものを十分理解してから、このデータをみることが重要だと思えます。

例えば就寝状況を見ると、東京では24%の子どもたちが「おとなと一緒に寝ている」ということですが、それは家族が非常に仲がよいということを示していると思えます。ただアメリカにおいては、その割合がたった1%だということを考えますと、アメリカでは「おとなと一緒に寝る」ことが当たり前ではないということです。つまり、5年生ともなれば、「おとなとあるいは両親と一緒に寝る」のは当たり前ではなく、したがっておとなと一緒に寝ていないということが、家族がバラバラであるということを示すものではありません。

我々は家族ということについてよく議論をしますが、そうしたとき、例えば、アメリカにおきましては昔の家族像に戻るべきだということがいわれてきました。つまり、昔はどういう家族像であったのかということを知らなければなりません。アメリカの離婚率が一番高かったのは、今年(1994年)ではありません。アメリカでは第2次世界大戦以後、離婚率が最高に達しておりますし、また、100年前(1894年)の方が片親しかいないという

子が多かったのです。現在、核家族化で家族がバラバラになっているということがよくいわれますが、アメリカにおいての核家族というのは、今までになくしっかりとした絆を持っていると思えます。といいますのは、寿命が非常に長くなったということ、それから栄養失調がなく、そのため家族のメンバーを失うことが少なくなってきたからです。ですから両親と2人の子どもがいるという、そうした核家族に住む子どもが、以前に比べて非常に多くなったのだと思えます。

アメリカの典型的な家族といえば、子どものいる共働きの家庭です。これがアメリカの傾向ですが、それをもっと大きな歴史という枠組みの中でみてみますと、次のことがいえると思えます。家族というのは、時代と共に変化してきています。また、このような変化があるからといって、家族がバラバラになってきているのではなく、まわりの環境が変化するにしたがって、家族のあり方というのが変わってきているのです。ですから、共働きをしているからといって、決して家族の結びつきが弱くなったというわけではありませんし、また片親だからといって、家族がバラバラになってしまったり、家庭が崩壊するということでもありません。

ただここで、我々がもっと関心を寄せなければならぬのは、子どもが学んでいく過程においての家族の重要性ということです。子どもにとって家族は、大変重要なわけです。

アメリカでは次のような傾向があると思えます。それはまず、両親が働いていた場合に子どもに対して関心が少なくなり、子どもは両親と共に過ごす時間が少なくなってしまう



と、一般的にはいわれていることです。私自身は必ずしもそうだとはいえませんが、しかしその点について、我々は注意しなければいけないと思います。

今回のデータによりますと、71%の母親が外で働いております。しかし父親が外で働いているのが何%かはわかりません。というのは、そういう質問をしないからで、父親が外で働いているということを当たり前と受け止めているからです。しかし、この点をもう一度見直す必要があると思います。すなわち親のどちらが、子どもと一緒にいられるのか、そしてどのくらい一緒にいられるのか、そういったことをもっと細かく見ていかなければならないと思います。

先ほど申しました通り、アメリカでは71%の母親が外に出て働いておりますけれども、65%の子どもが「家族全員と夕食を共にしている」と答えています。すなわち3分の2の子どもたちが、多くの場合、家族と一緒に夕食を共にしているわけです。親が外に出ていても、家族でやる事柄、活動はしっかりなされているといいでしょう。また、82%のアメリカの子どもは、「親が自分に関心を寄せてくれている」といっています。つまり、自分がどういったことを考えているかを十分理解してくれているといっているのです。

第2番目のアメリカでの傾向というのは、片親の家庭が非常に増えているということです。今回の調査結果によりますと、15%が片親の家庭です。

そして59%の子どもたちが、「もっと親と話す時間がほしい」と思っています。しかし、現実にはどのくらいの時間を親と話しているのかどうかはわからないわけですから、この点について調査しなければならないと思います。そしてまた40%の子どもたちが、両親に「世話をしてほしい」といっています。

しかし、今まで満足だというパーセントもかなり多いということも見なければなりません。ですから、変化する環境の中で、過去と違ったやり方で家族のあり方というものを考

えなければならぬと思います。例えば、過去においては母親が働くというケースはまれでしたので、通常は母親が食事を作ったわけです。しかし今は多くの母親が外に出て働いておりますので、他の家族のメンバーが助けなければならぬわけです。そうした中で、家庭生活で誰が家事育児をしているかについて、「父親が食事の準備をすることもある」という結果が出ています。ただここで重要なのは、全員が1つのテーブルに座って食べるということです。つまり、誰が用意をするかというのが重要なのではなく、どういった家族のメンバーと一緒に食事ができるかということが大変重要なのだと思います。

さて、およそ50%のアメリカの子どもたちは、結婚にはっきりとした確信を持っていないといっています。しかし97%の子どもたちは、子どもがほしいといっているのです。すなわち多くの子どもたちが子どもを持つことはいいことだと思っているわけですが、果たして結婚というものがいいのか、半分の子どもたちがわからないという感じを抱いています。これは大変興味深いデータだと思います。

以上のように、アメリカの子どもたちは子どもを持ちたいという願望ははっきりとしています。結婚についてはまだはっきりわからないといっています。そして、男の子も女の子も、結婚後も仕事を続けるだろうといっています。ただここでちょっと注目したいのは、女子の方が結婚後も仕事を続けると思っている点です。男子が自分の妻に仕事を続けてほしいという数値よりも、女子の、結婚後も仕事を続けたいという数値の方が大きいわけです。

ここに「ニューヨークタイムズ」の調査結果がありますが、男子は19%、女子は7%が結婚後は女性は家庭に残るべきだと考えています。つまり、大半の男女は、結婚後も仕事を続けるべきだと考えていることを報告しておきたいと思います。

こうした傾向は、過去と違ってきているということがわかると思います。女性が外で働くということは、その女性に期待される役割

というのも変わってくるのは当然でしょう。そして75%の子どもたちが、結婚した場合には家事の分担がなされるべきだといっています。つまり、クリーニングにしても、育児にしても、分担するべきだといっています。

表18を見ますと、女子の方が男子よりも家事の手伝いをより多くやっていることがご理解いただけると思います。しかし結婚したら、その分担をしなければならないといっています。ですから必ずしも、自分の現在の家族が将来の家族像と一致するわけではないのです。

今回の調査研究は、アメリカ人にとって大変に有用であったと思います。特に子どもが家族に対してどのような考え方をしているのか、そして家族に対してどのような意味合

いを感じているのかをみるのに有用だったと思います。家庭の崩壊ということがいわれていますが、しかしながら片親であるか否かはそんなに重要なことではないと思います。

ともあれ、子どもがおとなになるまでは、家族の役割が大きいのではないのでしょうか。それにはまず、子どもに対して親は、どんな責任があるかということを考えなければなりません。もっとも、その答えは時代と共に変わってきていることも事実です。ある時期は暖かい住居と食事を与えればよいと考えられていたわけですが、今はより多くのことが期待されています。安全な環境、健全な環境を提供すること。たんに物質的な食べ物とか、家があるというだけでなく、子どもが学べる

表18 家事の手伝い × 性

(%)

	東京		上海		ソウル		ロンドン		ニューヨーク	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
洗濯	6.2 (51.7)	12.0	23.3 (90.0)	25.9	11.3 (90.4)	12.5	12.5 (48.4)	25.8	9.2 (51.4)	17.9
部屋の掃除	11.6 (54.0)	21.5	45.4 (98.3)	46.2	21.4 (70.4)	30.4	29.2 (67.3)	43.4	26.0 (84.7)	30.7
夕食後の皿洗い	18.2 (54.5)	33.4	42.1 (79.4)	53.0	9.4 (36.2)	26.0	39.9 (88.3)	45.2	28.1 (79.8)	35.2
夕食の手伝い	30.1 (58.2)	51.7	23.2 (126.1)	18.4	35.4 (61.6)	57.5	37.4 (73.8)	50.7	45.5 (76.6)	59.4
部屋の整理	37.5 (72.3)	51.9	61.8 (91.0)	67.9	51.6 (71.8)	71.9	49.1 (93.0)	52.8	51.6 (88.8)	58.1
男子/女子 (平均)	(58.1)		(97.0)		(66.1)		(74.2)		(76.3)	

「毎日」+「わりと」する割合  
 ( )内は  $\frac{\text{男子}}{\text{女子}} \times 100$

環境、つまり社会に出て成功できるようなことを学べるような環境が必要だということです。そのためには家族の存在が不可欠なのです。もちろん、国によっては必要なものは異なるでしょう。

アメリカでは、親は経済的に成功するために、あるいは周囲のおとなとのよい関係を築くために必要だと考えられているのです。ま

た、いろいろな楽しみを得るために助けるとか、精神的な支えもしてあげなければなりません。もちろん、これらをすべて満たすことはむずかしいことです。しかし、親が子どもに対して責任を全うするためにはどうしたらよいか、つまり、子どもにどのような援助をすることができるかを考えなければならないと思います。

## ●保護する家族と自立させる家族))

深谷和子 (日本)

まず、最初に日本側の研究者が用意いたしました今回の調査結果に、4人のパネリストの方々から、それぞれ興味深いご意見をいただきましたことを心から感謝申し上げます。

今回の調査結果と、4人のパネリストの方々のご意見なども総合しながら、子どもに果たしている家族の意義をまとめてみたいと思います。

今回の調査の結果、家族が子どもの成長に果たしている役割をみていくと、2本の軸でこれを説明することができると考えられます。1本目の軸は左端を子どもを護る家族、右端を子どもを自立させる家族という軸で考えたいと思います。子どもを護る家族を、例えば、私からいえば左ですが、こちらに、子どもを護る家族というコンセプトを置きますと、それを代表するのは上海の家族だろうと思います。反対の子どもを自立させる家族の典型としましては、これはロンドンの家族を取りたいと思います。その間にソウル、それから東京、ニューヨークを置くことができるのではないかと思います。

まず上海の家族は、5つの都市の間で、子どもを最もよく護っている家族であります。

せっかくのレポートですから、データを拾ってみたいと思います。図10をご覧ください

い。これは、家族評価のまともになっております。これからわかりますように上海の家族は、先ほど基調報告者が申しましたが、「大変仲がよくて、みんなが幸せで、親戚とも仲がいい」、これらが5つの都市の間でトップであります。それからまた、図は示してありませんが、親が大変子どもを心配しておりました。「30分学校から帰るのが遅れたとき」とか、「風邪をひいて熱を出したとき」に、上海の親は5つの都市の中で一番子どもを心配しております。

それから、家族の中で家族同士の気持ちが通い合っているとか、親が自分の気持ちをいつもわかってくれるという感じを子どもが持っておりました。それから、自分にとって親というのはかなりわがままを聞いてくれる存在だと。例えば、このおかずがいやだからたまご焼きが食べたいといったときに「きつと作ってくれるだろう」と答えたのは、やはり上海の子どもがトップでした。

さて、もういっぺん、レポートに戻りましょう。図11をご覧ください。これは「もっと親が自分の世話をしてほしい」という数値ですが、上海の子どもが一番多くなっております。その他にも、「もっと親と話す時間がほしい」とか、「遊んでほしい」というよう



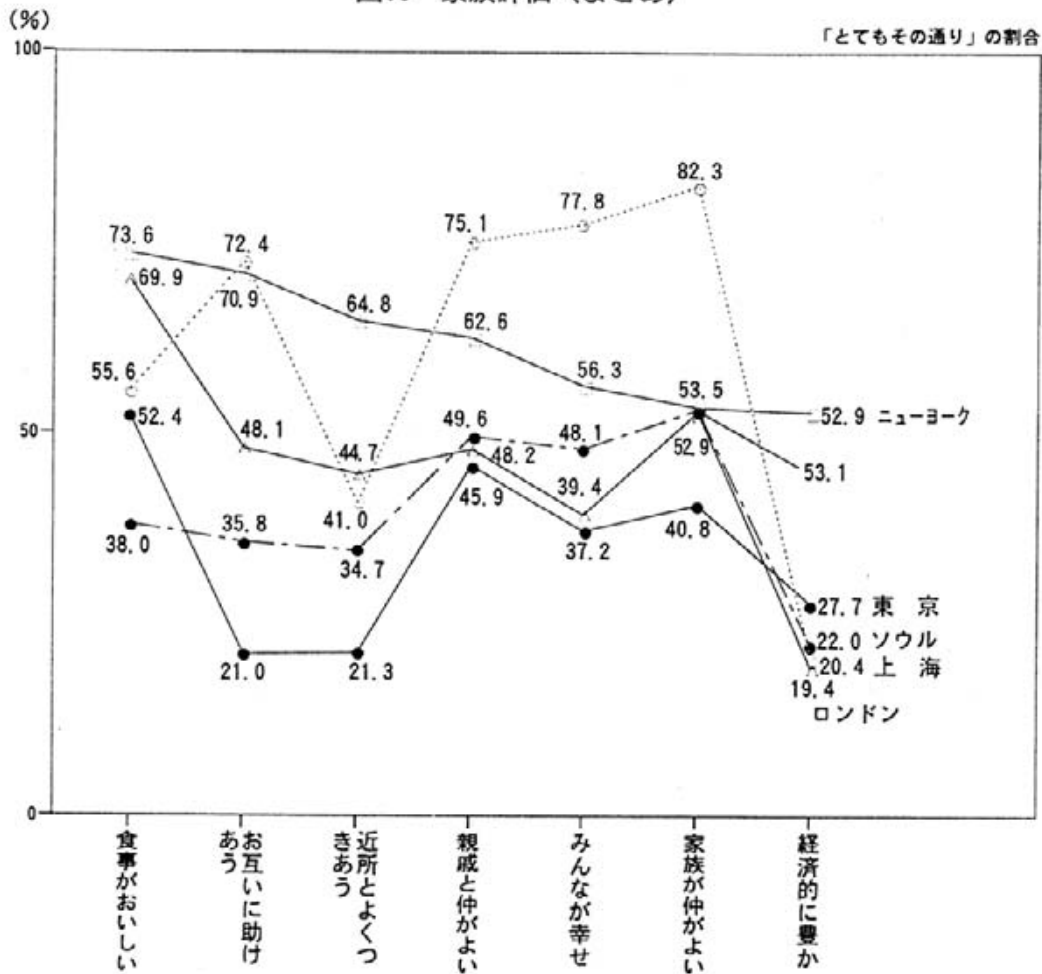
な親に対する要求を持っておりま。

先ほどシェークシャフト先生が、「もっと親と話す時間がほしい」といっても、何時間話しているかの数値がなければ意味がないだろうとおっしゃいましたが、私はちょっとそれについては違う意見を持っておりま。例えば、1時間話すことができても満足していない子どももおりま。15分しか話をしなくても満足している子どももいるでしょう。そうすると、時間の長短というのは別として子どもがもっと話をしたいと思っているか、

それとも親と話すのはごめんだというふうに考えているかではないでしょうか。そのように項目を設定しておりま。

以上のように考えますと、子どもを護る家族というイメージがおわかりだと思いますが、その結果子どもを護る家族からは、どうい子どもが成長してくるか。これは一口でいってしまうと、昔の子どものような子どもらしい子どもだろうと思いま。古き良き時代の子どもは、大変主観的で、非常に幸福感が強く、自己中心的でした。日本にも確かに昔

図10 家族評価（まとめ）



そういう子どもらしい子どもがおりました。上海の子どもたちは、データの中から拾い出すと、大変自己評価がよいのが特徴です。例えば正直とか親切が、5つの都市の中でトップです。そして幸せ感が強い。71%の子どもが、自分は幸せだといっています。これは、5つの都市の中で、断然数値が高くなっており、7割の子どもたちが、「とても幸せだ」と幸せ感を持てる社会というのは、大変うらやましいと思います。

ところで、今の日本では不登校が問題になっております。心理的な理由から学校に行けない子どもが社会問題化しておりますが、図12で見ますと、上海の子どものほとんどが「学校へ行きたい」といっており、「学校へ行きたくない」という子は本当に限られた子どもたちであることがわかります。また「毎日が楽しい」といっておりますし、「早くおとなになりたい」といっていたデータもございます。早くおとなになりたいというのは、子どもの現在が不満だということではなくて、きっとおとなになってから自分の前には、もっと素晴らしい未来がひらけているだろうというふうに、社会に希望を持っているということでもあります。

それから家庭的な達成について、(小学校5年生ですから、結婚とか親になるというの

はまだ先の話ですが)「よいお父さん(お母さん)になれる」のように、家庭人としては幸せな状態になれるだろうという、楽観的な気持ちを持っている子ども他の都市に比べると64%と大変大きな数値でありました。これらの明るい自己像は、家庭的な要因、子どもを護る家族の中でだけ育てきたとはもちろん思いませんが、学校の要因も、社会の要因もあるとは思いますが、それには一応ふれないこととして、とにかくそういうように、子どもらしい明るい幸せそうな子どもが育てきております。

上海の場合は、92%の共働き率です。子どもを保護するという意味でいえば、専業主婦が側にいた方が子どもは保護されるのではないかと思いますので、その辺は上海の場合、マイナスの条件ではないかと思うのですが、にもかかわらず、以上のように子どもらしい子どもが育てております。つまり繰り返になりますが、上海の家族は子どもに対しての保護機能を持った家族とまとめることができるのではないのでしょうか。

ただし、問題点がございます。先ほど下先生からもいろいろご指摘がございましたが、例えば健康よりも、学校へ行くことの方が優先されているということも1つです。体調が悪くても、とにかく登校しなさいと親が言う

図11 もっと親が自分の世話をしてほしい(図3再掲)

	(%)			
	とても そう思う	わりと そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
東京	8.3	16.9	50.1	24.7
上海	45.4		30.4	18.0
ソウル	44.7		29.0	18.0
ロンドン	14.7	27.7	25.3	32.3
ニューヨーク	14.1	25.4	30.4	30.1

というのが一番多くなっておりまして、しつけの方では、テレビを見ないで勉強しなさいと親から圧迫されております。それから自分の家の居心地についての結果をみると、先ほど基調報告者が説明していましたが、家庭がいまひとつのんびりしたものというふうを受けとられておりません。自分の家庭の中で、家族の中で、のんびりしない子どもが29%。これは大変高い数値であります。親から勉強を期待され圧迫を受けるために、家族の中で、のんびりできない気持ちがあるような感じがいたします。しかし、それにしても世間と違う保護された環境が、上海の家族であります。上海に次いで、ソウルが似た傾向を示しております。

2番目に、ロンドンの家族は子どもを自立させる家族の典型とみなすことができます。子どもを自立させる家族は、社会の厳しさを反映している環境であります。子どもを早くおとなにしようとしている家族であります。世間の風を家庭内に持ち込むまいとするのが上海の家族であれば、早くから世間の風を家庭内に持ち込んでいこうというのが、ロンドンの家族のように思われます。

また、ロンドンでは上海に次いで、母親のフルタイムで働く割合が32%と多くなっております。これは子どもを保護するという観点

からは、あまりいい家庭ではありません。それから父親の同居率が最低でして、これは離婚率の高さを示すものだろうと思います。また、朝夕食に家族全員がそろう割合は5つの都市の間で最低という点に、家族のまとまりの悪い様子がみられます。

しかし、しつけでは非常に自立性を重んじておりまして、例の「スニーカーをどうするか」ですが、子どもに決めさせています。ただし家族が「休日どこへ行くか」のような家族全体のことは親が決める。ですから、子どもに任せる部分と、親が決定権を持つ部分を分けております。それから、子どもが親は自分のわがままを聞いてくれないだろうと理解しております。家族評価については、その評価が客観的であります。ニューヨークの子どもは、自分の家族を底抜けにいい家族だといっておりますし、もちろん上海の子どもも、家族をいいものと評価しておりますが、ロンドンの子どもは、客観的でさめた目を家族に対して注いでおります。したがって、東京ほどネガティブな家族像ではありませんが、まあまあな家族ではないかという感じを持っております。それから、気持ちは家族の間でそれほど通じ合っていない。これは実態に近いのではないかと思います。

では、このように子どもの自立性を促進す

図12 学校へ行きたくない

	とても そう思う	わりと そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない (%)
東京	12.4	15.0	36.0	36.6
上海	2.2 7.7	88.8		
ソウル	12.1	16.0	38.4	33.5
ロンドン	32.1		30.0	15.8 22.1
ニューヨーク	41.8		28.3	12.1 17.8



る家族の中では、どういう子どもが育つのでしょうか。一口にいってしまえば、おとなっぽい子どもだろうと思います。おとなっぽいというのは、先ほどの子どもっぽい子どもの反対でございまして、客観的に物事が判断でき、冷静でさめた目を持つ子どもといいたいでしょうか。日本でも、最近の子どもにそういう姿を感じることがございます。

データでみてみますと、ロンドンの子どもの自己像や幸せ感はまあまあです。ニューヨークや上海よりは、自己像は低いのですが、東京やソウルよりは高いというふうに、まあまあです。学校は、特に行きたい場所ではないけれど、非常に行きたくない場所でもない。ニューヨークに次いで、学校に行きたくないぐらいのところとなっています。

「毎日がつまらない」というのは、ソウルが一番つまらないのですが、それに次いでロンドンの子が、「毎日がつまらない」といっております。

自分の家の居心地ですが、「緊張する」とか「いらいらする」が、ある割合で出てきております。

将来についても、将来は家庭的な達成も、社会的な達成も（これは金持ちになるというような、また有名になるような達成ですけれども）ほどほどだろうと、非常に現実的、客

観的に将来を見通しております。

それからロンドンの子は、親にあれをしてくれ、これをしてくれという要求も5つの都市の間では最低であります。むしろ親にはあまりかまってもらいたくないと思っているようです。

また将来の親との関係は、親と離れて住んでもいいとか、親を老人ホームに入れたい数値が最も高い率であります。もちろん老人ホームに入れたいというのは、別に親子関係が冷たいわけではなくて、老人福祉施設が整っているということにもなると思いますが、それにしても、自分で親の面倒を見るという子どもの割合は、上海とは対照的であります。

以上のように、ロンドンの家族をみてまいりますと、何となくロンドンの家族は、冷たいバラバラな崩壊した家族のような感じを受けますが、そうではないのかもしれませんが、先ほどファーナム先生が、家族の危機なのか、それとも家族の変化なのか、どちらに解釈すべきだろうかとおっしゃったのですが、とても印象的に受け取りました。

今、申し上げましたような、子どもの自立を促進する家族を、崩壊した家族のイメージで取るか、それとも（今回のサンプルが）小学校の5年生ですからこのあたりから思春期にさしかかりますが、思春期的特性なのか。自立性の高い場合、つまり親からの心理的な自立が進行していれば、家族の中にも、いらいらするとか、緊張するとか、親とうまくいっていないと思う気持ちを持つのは当然でありまして、むしろ幼稚な子どもではなくて、自立がかなり進行している子どもと考えればいいのかもかもしれません。

ロンドンに似ているのは、当然ニューヨークです。日本はどうかというと、その中間といえましょう。これは、ほどほどに保護してほどほどに自立させているという言い方もできますし、保護も十分ではない、自立も十分させていないというふうに考えることもできます。これはゲストスピーカーの皆さんのご意見をぜひうかがいたいところだと思ってお



ります。小学校5年生という調査対象ですから、5年生という年齢を、保護が必要な年齢か、自立をもっと促進させるべきか、年齢の段階で考えていくべきだと思います。もちろん社会とか文化的な背景なども絡み合わせて、評価していかなければならないと思います。

残りわずかとなりましたので、もう1つの軸を考えたいのですが、とりあえず軸を提示するだけで終わりたいと思います。

ジェンダー問題の関連で、ジェンダーロールを保存する、または再生産する家族と、ジェンダーロールを解消させる家族という軸を考えたいと思います。しかし、この軸では、先ほどの依存と自立の軸のように5都市が一直線上に並びません。ただジェンダーロールを保存する、または再生産する都市は、文句なしに東京です。その隣にソウルがきます。そして、その隣にニューヨークとロンドンと上海がきますが、今申し上げた順番で、上海を一番性差を解消する家族と考えていいのか、それとも3つの都市、ニューヨーク、ロンドン、上海は並べることはできないけれど、まとめて性差を解消しようとする方向の家族なのかという、そのあたりは論議が分かれるところだと思います。

ただし上海は共働き率が高く、しかも子どもを一人っ子にしました。そういうふうは無理やり性差を解消しようとして、性差を解消する家族の姿がでてきたわけですし、おそらくニューヨークとかロンドンは、社会の1つの理想の姿として、性別によって差別されるようなことがあってはいけないという理想や理念の問題で、性差を解消しようとしている結果かもしれません。いずれにしろ、そういう2本の軸で今回の家族をめぐる国際比較調査の結果が説明できるように思います。

ここで少し補足説明をさせていただきます。

先ほどから、自立と保護ということが話題になっていますが、私は世間の風から護るという意味で保護する家族に「護る家庭」というネーミングをしました。

さて、子どもを保護する家族がいいのか、自立させる家族がいいのかを考える際に、大事な視点があると思います。1つは子どもの発達段階、年齢を考えなければならない。例えば、赤ん坊のときに自立を急がせるのは東洋、西洋を問わず、これは無理で、子どもを親に依存させるところからスタートさせなければならない。そして、十分親への依存を学習したあとで、次に自立を学習させなければならない。ただ、保護から自立へ移行するのは何歳くらいがいいかは別問題です。また年齢だけでなく、個人差もあります。これは、障害児を考えてみるとわかると思います。

もう1つは、その社会がどういう社会かということだろうと思います。例えば、韓国のように進学競争が激しいとか、また離婚率が高いロンドンのものであれば、子どもを早いうちから自立させなければならないのかもしれない。ですから、人間の生き方として早くから自立させることが大事だと考える社会か、過度に自立を主張するより、妥協してお互いを合わせてやっていくという特性を要求される社会か、どちらの社会がいいのかによって、自立させる家族がいいのか、保護をする家族がいいのかは変わってくると思います。

その辺をたんに家族だけで考えずに、例えば中国の例をひかせていただきますと、中国の一人っ子政策は本来わがままで自己中心的な子ができるはずで、ところが、中国に行くと子どもたちをみますと、日本の子どもよりはるかに社会性のある子が多い。それは集団教育といいますか、社会、国家に奉仕する人間を育てるという理念に立って、子どもを教育しているからでしょう。家の中ではわがままで、「たまご焼きを作ってほしい」と言えば、親が作ってくれる状況なのですが、学校に行けば、集団に貢献していくという態度を子どもたちが持っている。この辺りの背景からバランスがとれて成長する。それがうまくいっている理由かと思います。





### ●地球村の相互文化理解に貢献)))

李 光衡 (韓国)

この度のシンポジウムは21世紀の新しい教育を考え、それを実践するにあたって重要な指針になると思われます。また、国連が定めた国際家族年を迎えて、このような国際比較調査が行われたことは、お互いの文化を理解させる新しい視点を与えてくれると思います。

科学文明の発達で、世界が同時文化圏に属し、1つの地球村を形成していくという視点から考えてみますと、今回の調査は、まさしく地球村の相互文化理解に多くの貢献をしたと思われます。

豊かな地球村を作るためには、まず家庭の円満が何より大事かと思いますが、調査結果

によると、父親との同居率がソウルでは95%、それに対して、特に西洋で父親との同居率が低いのは、社会的・文化的な差はあるというものの、考えさせられました。

また、この報告書の中で問題なのは、「早くおとなになりたいか」の結果です。ソウルでは40%以上の子どもたちが「早くおとなになりたい」と願っているながらも、「いつまでも子どものままでいたい」が、上海の15%と並んで20%と低いのは何か深刻な問題があるのではないかという気がしました。この結果については、「勉強によるストレス」と報告されていますが、これから教育学者たちが、



この問題の解決方法を提示しなければならないと思います。

さて、今回の国際比較調査をさらに深めていただくために、現在の韓国の教育事情を少しお話しさせていただきたいと思います。韓国はご存知のように、ここ20年来、めざましい経済発展をしてきました。このような短期間で成長できたのは、国民の要望を満たすために、教育機会の均等にもとづいて、量的拡大に力を入れて政策を推進してきた結果といえると思います。しかし、これからは精神的、質的成長を追求する方向に教育の改善が要求されると思います。これに伴って、21世紀に要求される韓国人像は健康な、質的、想像力

の高い、さらに道徳的な人間があげられるでしょう。また、時代の要求に応じた教育を実現するために、教育政策の基本的な方向を教育の根本になる初等教育と中等教育に定め、一貫して調和のとれた人間育成と、社会建設においての変動的な役割を果たすことができるような教育の質的水準を高めることに重点を置いています。そのために、教育体制の改革と教育支援体制の確立に重点をおき、全国民の関心と協調のもとに大統領の直属の教育改革委員会を設置して、教育改革を推進しているところです。

## ●家庭にもカリキュラムを)))

デール・マン (アメリカ)

私たちは教育にかかわっておりましたが、おとなの方により多くの関心をよせてしまって、子どもを無視してしまう傾向があると思います。今回の調査では、子どもの声に大いに耳を傾けていますが、このことは大変意義のあることだと感じました。

私はこの1年間に15か国を訪れ、今回の日本が15か国目にあたりますが、特に、我々が持っている共通の問題に改めて驚かされます。一方では社会の構造を維持しようとしながら、もう一方で社会を変革しようとしています。いろいろなアイデアを保持し、そのアイデアで社会を変革しようとしているわけです。そうした環境を考えると、教育関係者はもちろん、親にとっても、いろいろなジレンマを生じるということになります。

アメリカには「子どもを育てるには村がかりでやらなければならない」という諺があります。これはある意味では伝統的な知恵であると思います。ある国はこうしたことを全く

学ばなかったか、あるいは学んでも忘れてしまったというのが現状です。アメリカはこうしたことを一生懸命、学ぼうとしているわけですが、まず教育の源とは何かということを知って見なければなりません。子どもはどのように学ぶことができるのか、ということです。

シェークシャフト先生がいましたように家族が第一義的にきます。家族は小さな社会ですし、親は子どもにとっての第一の教師です。2番目の教育の源というのは文化、TVや各種メディア、ビデオゲームなどです。3番目は友だち。特にティーンエージャーの場合は、友だちから学ぶことが多いのではないのでしょうか。4番目の教育の提供者は、学校です。そしてアメリカでは、最大の教育の提供者は誰かをみきわめようとした結果、家族であることがわかりました。学校は4番目で一番弱い所に位置し、それほど影響力がないわけです。



しかしアメリカにおいては、一番影響力がある教育提供者である家族をコントロールすることができません。離婚するな、女性に働くなともいえません。このようにアメリカでは、家族の問題に関しては介入しませんが、学校制度には常に介入しております。つまり社会的、政治的なプレッシャーが一番影響力の弱い学校にかけられているわけです。多くの規制があるのに資金はあまりなく、小学校に提供されるお金よりも、ペットフードにかけられるお金の方がはるかに大きいわけです。これは悲しいことです。社会にとってもよいことではありません。

ところで、子どもの将来は3つの力が決めるといわれています。まず文化、次に経済、そして政治です。文化には2つあります。1つはポピュラーなもの、ロック音楽、プロスポーツ、コンピュータなどです。もう1つは聖なるもの、儒教、仏教、キリスト教、ユダヤ教などです。

2番目の経済についての変革ですが、我々はますますグローバルビレッジ、地球村に住むようになってきています。にもかかわらず、例えばアメリカはヨーロッパ地域よりアジア

太平洋地域の貿易の方が多いのに、アメリカの高校生が1年間に学んでいるのはフランス語、ドイツ語といったヨーロッパ言語なのです。これでよいのでしょうか。将来の経済というのは、学校の制度とより結びついていかなければならないと思います。

3番目の力は政治だと思います。日本は近い将来、55歳以上の有権者が大半を占める最初の国になります。有権者の大半が55歳以上になるということは、学校か病院を建てるという決断のときに、答えは明らかでしょう。子どもは有権者ではありません。この点でも学校制度と政治がより好ましいかたちで結びつくということが望ましいわけです。

東洋の社会をみると、経済と文化の2つに感銘を覚えます。経済構造など、我々は多くを学ぶことができると思います。また文化的な価値観を、社会は求めていると思います。ですから、子どものことを心配している人々は、東洋の文化を規範として試してみるのもいいかもしれません。

ここで公式が成り立つと思います。文化、経済、政治、そして学校という因子があるわけです。文化はある国においてはマイナスの



兆候がみられますし、逆にプラスになっている国もあります。全部が足されて、よいものがでてくる場合もありますし、また、国によっては文化、経済、政治、社会といった因子をかけ合わせることによって、すごくパワフルになっているところもあると思います。

ここで1つ提案したいのは、家庭におけるカリキュラム作りということ。つまり、教育における新しいエンジン作りをしなければならないと思います。私は賢明で最良な親になりたいと思っていますが、残念ながら必ずしもそうではありません。ですから、学校にカリキュラムがあるように、家庭においてもカリキュラムを作ることが望ましいと思います。そのときは、どのように家族を支えるかを解いてみなければなりません。過去の家族、未来の家族ではなく、現在の家族のためのカリキュラム作りをしなければならないと思います。

次に、エデュテイメントということを上げたいと思います。これは、エデュケーションとエンターテイメントの造語です。幼児学者は、遊びは1つの素晴らしいレッスンだといっています。では学校教育の要素を、

遊びの中に取り入れることができるでしょうか。サッカーあるいはビデオゲームをやっても、子どもたちは何かを学んでいると思います。あるメーカーが、1つのビデオゲームを出しました。そのビデオゲームには100ページものマニュアル本がついています。この分厚いマニュアル本を読むには100時間かかるわけ。100ページのマニュアル本を読み、そしてゲームのカートリッジの最後まで到達するのに100時間かかるわけ。この2つはカリキュラムといえると思います。そして学ぶことは、楽しみでもなければなりません。これは98%の母親がいいです。おもちゃ店に来る親が常にいうことは、子どものためになるおもちゃは何か、ということです。福武総一郎氏は「まじめな遊び」ということをおっしゃっています。これはすばらしい言葉だと思います。すなわち、エデュケーションとエンターテイメントの、2つのすばらしいエンジンを1つに結びつけるものであるからです。私はその橋作りのお手伝いできればと思います。

## ● 児童精神科医からみた家族)))

田村 毅 (日本)

私は児童精神科医であり家族療法家でもあります。そうした視点から、ふだんから問題を持った子どもや、家族を診ております。また私は、イギリスとアメリカでの生活体験もあります。そうした視点でコメントしたいと思います。

今回の国際比較調査のすばらしい点は、自分自身を客観的に眺めることができるということだと思います。ファーナム先生は西洋と東洋との違い、深谷和子先生は子どもを保護

する家族と自立させる家族という、2つの概念を対比させました。私もデータをみて同様に感じました。私の考えでは、一方では子どもを自立させる家族があり、もう一方では密着した家族関係がある。そしてその真ん中に日本があるという構造です。自立した家族というのは、ニューヨークやロンドンのアングロサクソンの家族で、明確なルールがあって厳しいしつけがある。「ミセス・ダウト」という映画は、離婚した父親と子どものふれ



あいを描いています。ラストシーンでは、家族は遠く離れて住んでいるが、家族に愛があれば大丈夫、個人個人が自立した上に立って家族を作っていこうといます。もちろん、その背景にはそうならざるをえない家族の崩壊や離婚があるわけです。

もう一方の密着型は、今回の調査では上海とソウルに顕著にみられたと思いますが、生涯にわたって家族の一体感を保つ、あるいは家族という枠を作り、その場を共有することによる家族関係です。

それでは、日本はどうでしょうか。その中間です。もともとは伝統的には密着型でしたが、最近の核家族化、少子化と共に、そうした伝統的な結びつきが弱まってきました。では自立した家族関係ができたかという、それはなはだ疑問です。だとすると、我々の行き先はどうなるのでしょうか。以前のような家族という枠組みがあって、一緒にいるだけで家族が通じ合うという関係はむずかしいと思います。したがって、個々の家族関係、つまり母親と子ども、父親と子ども、夫婦間を大切にしていけないといけなわけです。

そこで1つ提言したいのは性役割観、ジェンダーロールということです。母親は主婦として家の中を担当し、父親は家の外を担当する。だから家族のことは二の次でよいといったような価値観は、これからのよりよい家族のあり方を阻害していることを強く感じます。

子どもが健やかに育つには、2つの重要な要素があります。1つは愛着、アタッチメントです。もう1つは分離、インデペンデンスです。特に愛着は、小学校に上がる前くらいの小さな子どもには、基本的な信頼関係をつくるために大切です。もう一方の極に分離があります。つまり、思春期以降になると子どもは親から離れていくということです。この両方のバランスがきちんと保たれれば、子どもは健やかに成長することができる。ところが

が、先ほど話しましたような性役割観でいきますと、母親が密着して、父親が分離してしまう。これはある意味では仕方がないかもしれませんが、こうしたことは問題を持った家族には特に顕著に現れています。

私が診ている子の3分の2以上は、不登校の子どもたちですが、児童精神科医を訪れるのは勇気のあるお母さんということがいえると思います。話を聞いているうちに、お父さんにも来ていただいた方がよいということになれば父親にも来ていただけます。そうしますと、父親との関係がいかにか空虚だったかということがわかります。最近では学校の運動会にビデオカメラを持って行って、愛児を撮影をしているお父さんの姿を多く見かけますが、一步つっこんで子どもとの関係をみると、まだまだだなということを感じます。これからの父親は日常生活におけるこまごまとした子どもとのふれあい、あるいは夫婦間のコミュニケーションが大切だと感じます。

その一方で問題を持った家族の場合、母親とは密着しています。不登校の原因を家族だけに求めるのは非常に危険ですが、しかし実際に多くの人にお会いしていると、「母子カプセル」といってしまいませんか、つまり母親と子どもが、小さなカプセルを作っているケースが多いのです。しかも外部の人は、そこに立ち入ることさえできないというような家族に多く遭遇します。

これから生きていく私たちは、自由で柔軟な家族関係が必要だと思います。ですから、これまでの性役割をはなれて、父親が育児に参加すること、母親が家の外に活躍の場を求めていくこともいいでしょう。そのような自由な男性、あるいは女性のあり方を可能にしていく社会が、今後は必要だと思います。また教育者は、このことを次の社会を作る子どもたちに強く伝えることが必要だと思います。

---

### Ⅲ. フリーディスカッション 「家族の中の子どもたち」



## フリーディスカッション

# 「家族の中の子どもたち」

### ●相互依存に学ぶ))

深谷(昌) これから依存と自立をテーマにディスカッションしていただきたいと思います。家族の中で子どもということ考えたときに、この依存と自立という2つのあり様があると思うのですが、これは歴史的、あるいはそれぞれの国の社会事情や文化などによっても、いろいろ違ってくるのかもしれませんが、そこでこうした背景をふまえて、望ましい家族とはどのように考えたらいいか、あるいは健全な子どもとはどんな子どもなのかなどについて、ご自分のお考えをご自由におっしゃっていただきたいと思います。

はじめに西洋での子どもの自立について、ファーナム先生にお話しいただきたいと思います。

ファーナム 自立と依存の問題は非常に重要な教育の問題だと思います。イギリスについ

てお話ししますと、中流家庭の親の多くは、自分の子どもがおとなと対等にやっていると、とても誇りに思っています。おとなと対等にやっていると、生きる力を持っているということです。ですから早く自立でき、1人で生きていける力をつけさせるために、子どもを寄宿舎がある学校(ボーディング・スクール)に入れてしまいます。例えば5歳の子でも、家から400マイルも離れたボーディング・スクールに入れて、休暇だけ家に戻ってくるということが行われております。文化によっては、こうしたことはあるいは不健全だと思われるかもしれませんが、イギリスでは子どもにとっていいことだと思われるのです。なぜかといいますと、こうした寄宿舎生活は小さい頃から自立の能力を育むことになり、また自分たち



と同じ年代の子どもたちと過ごせる機会が多くあるということからです。また、競争の激しい子どもの世界を通して、生きることを学ぶことができるからよい教育だという理由もあります。

もちろんその一方では放任主義の家庭もあり、子どもにカギを与えてパブなどに飲みにいってしまうという親もいます。このように子どもを保護したがる、つまり悪い意味で子どもを早くから自立させてしまうという親もいます。

我々からみると、日本はハッピーな社会であり、経済的にも成功しているようにみえます。なぜ成功したのかと考えますと、日本は集団主義といいますか、伝統的に食べるのも一緒、仕事も、寝るのも一緒というように、何事も仲間やチームでやるということに起因しているのではないかと思います。

過去において私たちは、確かに自立ということを非常に尊重してきました。しかし今は逆に、チームワークといいますか、相互依存ということを重んじなければならないのではないかとことを思いはじめています。もっとも西洋は、昔から個人の成績がよければ多く支払いますが、チームの成績に対してはあまり支払わないという社会ですから、日本のような相互依存を取り入れることがプラスになるのかマイナスになるのかわかりません。ですから今のところは自立、依存をどのようにしていいかわからない。どっちつかずの状態だと思いますが、日本から相互依存について学びたいと思っています。

李（貴） 自立と依存の問題があまりに二分化されているのではないかという印象を受けました。私は子どもは過保護にするべきではないという意見です。過保護は子どもの独立心を阻害するからです。しかし子どもを適切に保護することによって、家族の間の絆が強められれば、保護という側面はむしろ子どもの独立心を養ってくれるのではないかという考えも持っています。

私事で恐縮ですが、1つの例をあげますと

私は息子に対して、物的あるいは環境的な面での役割を果たしましたが、精神的な面ではすべてを子どもに任せてきました。そのように育てたことが、私と息子の関係を成功させたと思っています。また、今回の調査では上海とソウルは家族間のつながりが強いという結果が出ていますが、その一方で、現在の韓国の若い人たちは、非常に独立心が強いということをし添えておきたいと思います。深谷（和） 李先生がおっしゃった依存または保護と自立を二分化して考えてはいけないのではないかというご意見に賛成です。と申しますのは、親から自立した、または独立した子どもが、誰からの精神的なサポートも受けずに、自分だけの考え方でものごとを決めるとか、1人で自分だけを支えていけるかという決してそうではないからです。つまり家族から分離して自立した子どもというのは、次には判断や精神的な支えを仲間に移すのではないのでしょうか。

ファーナム先生がボーディング・スクールの例をお出しになりましたが、子どもは親からは離れるが、今度は寄宿舎の仲間に依存の対象を移し、若者同士の判断を参考にしていくとか、寄宿舎での生活を自分の精神的な支えにするということがうまく行われたのだろうと思います。学校を卒業すると今度は職場の人間関係とか、場合によっては生きている人間ではなくても、本の中の偉人やイデオロギーが支えになっているかもしれません。

その意味でも依存と自立は両極化して考えてはいけないのではないかという気がするのです。大切なことは、依存の対象をどのようにうまく移していくかということだと思います。ですから子どもが小さいうちは勝手に依存させ、ある年齢になったらどのようにうまく対象を移してやれるか、そのためには親が世間の風をどのくらい入れていったらいいのかということを考えるべきでしょう。それが依存から自立への、親の大事なかわりではないかという気がします。

## ●依存と自立を2次元で考える))

田村 私も李先生と深谷和子先生のご意見に賛成です。理想的な家族のあり方として、依存できる能力と自立できる能力という2つの次元で考えてみたらどうかと思います。つまり、グラフでいうX軸とY軸の関係で、他人と融合できる能力、自立できる能力、あるいは孤独に耐えられる能力、寂しいけれど自分1人で生きていける能力などのようにです。

ある調査によりますと、新しい発見とか大きな発明は、孤独なときにその考えが浮かぶといいます。孤独の効用といったらよいのでしょうか、そのようにいい面での孤独と、自立があると思うのです。その両方ができる能力を備えていて、時と場合に応じて、自立と依存の間を入ったり来たりできるフリーな人間関係で、何か問題があったときは集まってお互いが協力し合って問題を解決し、そうでないときは離れていることもできる。これが家族の理想的なあり方だと思います。

シェークシャフト このトピックについて私は少し違った見方をしています。それは私が女性だからというのも1つの原因かもしれません。アメリカにおいては女性が何かを行う場合に考えることは、自分がしたいことと社会や家族のニーズとのバランスをどうとるかということです。つまり私が欲するものと、家族のニーズのバランスをどうとるかということを常に考えて、そのジレンマに苦しんできました。私に限らず女性は、常に社会とか家族に対して、また自分自身に対する責任はなんだろうか、両者のバランスをどうやってとろうかということを生懸命考えてきたわけです。しかし私は、子どもたちと接する機会があると、そのたびに自分たちとは違った育ちをしてほしいと教えてきました。例えば男の子に対しては、他人とよい関係を持ち、家事にも積極的に参画しなさい、そうでなけ

れば、よい家族は生まれないということを書いてきました。また自分の娘を含めて女の子には、経済的に自立しなさいといいきかせてきました。

アメリカでは、男性は家族の経済を支え、女性は家作りをするというのが典型的なことでされてきましたが、今は男の子に対しても経済的に成功することはもちろん、家事をすることの大切さを教えています。個人のニーズ、願望をどのように満たすかということも大事ですが、それと同時に、社会のニーズをどう満たすかということも教えることも大切なことだと思います。

深谷(昌) お話をうかがっていて依存と自立ということが大分わかりやすくなってきました。1つは依存と自立は決して対立する概念ではないということ。そして年齢によって意味が違って来るだろうということ。また同じ年齢でも対象が必ずしも家族だけに限定されているものではないということなどがわかりました。

ところでイギリスでは、一般的に子どもは何歳くらいになったら自立させるのがよいと考えているのでしょうか。

ファーナム これについては、母親と父親の考えは違うと思います。母親のほうは本能的に子どもをより長く保護したがりですが、父親としてはより早く独立させたいと考えているからです。そして父親のほうが子どもが自立するためのトレーニングを提供するわけです。また、男性のほうが自立している子どもを誇りに思うようです。

私の知人の精神科医は、大変な拷問を受けた男性が、その後どうなるかということに興味を持ち、研究しています。例えば政治犯で捕らわれて投獄され、非常に苦しい目にあった1人の男性について、その精神科医はそう



いった苦しみを受けた人々がその後、どのような経緯をたどったかということ进行调查しました。その結果、多くの人々は順応性が高まっているということがわかりました。つまり刑務所という一種の寮生活を体験するうちに順応性が培われたというわけです。そして、いろいろな危険が待ち受けている社会に出ていっても、どのように生活すればよいかということを学んだようです。

中流階級に多くみられることですが、母親のほうが父親より子どもを守ろうというきらいがあるようです。

深谷(和) 子どもを自立させるということは遅かれ早かれ、どの家族もさせなければいけないことですが、子どもの自立化を備えている家族というのは、おそらく家族一人一人が自立して切り離されて生活しているのだと思います。その中で生活する子どもはそれで孤独感を持つか、自由を感じるかということなのではないでしょうか。

最近、社会学者たちがファミリー・アイデンティティーという言葉を使い始めています。つまり、どこの範囲までが自分の家族だと感じとる能力があるかということで、1つ

の家に住んでいても、みんなが我々の家族だというファミリー・アイデンティティーを持たなければ、その家族の間には愛がない状況だといえますし、遠く離れて住んでいて、全く違った価値観を持っていても、お互いがファミリー・アイデンティティーが持てれば、その中で子どもは安心して暮らせると思います。子どもは小さくて、不安定な弱い生き物ですから、子どもにいかにか安定感を与えるかが我々の課題だと思いますが、それは家族の中の安定でなくてもいいのかもしれませんが、ボーディング・スクールでも幼稚園でも、とにかくいろいろな場で安定感を与えることはできると思います。その意味では、たとえ母子家庭であっても、みんながばらばらに住んでいても、家族それぞれの価値観が違っていても、あるいは同性愛の家族であっても、要はファミリー・アイデンティティーを持てるかどうかだと思います。逆にそうしたファミリー・アイデンティティーを持てるような、柔軟で広い大きな心を、子どもの中に育てることができるかどうか、これからの子育ての課題かと考えました。





## ●男の子の技能の幅を広げる))

深谷(昌) 実は依存の問題は、今回の調査対象である小学5年生という年齢の問題ではないのです。この段階ではソウルも上海も東京もニューヨークもそれほど変わっていないと思います。私たちは日頃、小学生から高校生までの調査をしておりますが、日本の場合、高校生が母親に朝起こしてもらいますし、洗濯をしてもらうという結果が出ています。これはイギリスやアメリカの人々には考えられない状況だと思います。したがって日本は子どもを保護する機能というのはかなりうまくやっているけれども、子どもを自立させる家庭、つまりファーナム先生やシェークシャフト先生がおっしゃった発想、見方みたいなものが欠けている文化なのかと思いました。

次にテーマをジェンダーロールに移したいと思えます。まず、下先生にお聞きしたいのですが、中国では性差の少ない社会といわれていますが、いつ頃からこのような性差の少ない社会をつくろうとしてきたのですか。

下 確かに中国は男女平等の社会ですが、これは新中国が成立してからの国家の政策によるものです。しかし今でも農村は、やはり昔のように亭主関白のようです。また、一人っ子政策のもとでは女の子が生まれると跡継ぎがいなくなりますから、いったん故郷を逃げてしまって、もう1人産むという人がいるということを知ったことがあります。つまり農村と都市とでは事情が大違いだということです。

マン 性差については私がアメリカで最も研究したテーマです。アメリカでは性差がなく男女が平等のように思われておりますが、しかし今回のデータでも差は出ています。例えば男の子は、女の子よりお金持ちになりたいと思っておりますし、有名になりたいという志向も強い。また、ビジネスで成功したいとい

う願望も高いという結果です。この調査結果でもおわかりのように、男女平等を目指していても男女差は出てきてしまうわけです。では成功するおとなになるためにはどんな機能が必要なのでしょう。過去においては、男の子にはこの技能、女の子には別の技能を教えれば良いと思っていました。そして男女が一緒になると、必要な技能が全部そろえるという仕組みでした。しかし私は、一人一人がすべての技能を習得すべきだと思います。アメリカでは女性の役割が拡大したといっておりますが、一方で男性の役割はあまり変わっていないのです。今成長しつつある男の子は、30年前に大きくなった男の子と変わっていないのです。

人生をどうしたいかということに対して女の子の意識は随分変わっているのですが、男の子は変わっていません。このままいくと両者がおとなになったときに、緊張関係が生まれるのではないかと懸念しています。ですから男女平等に関しては、これからまだまだ作業が継続して必要だと思います。平等というよりむしろ拡大するという、男の子の技能の幅を広げることが重要だと思います。

深谷(昌) この10年から15年の間、女の子は非常によく変わってきたと思うのですが、それに比べると男の子は変わっていない。ですから男の子のアイデンティティをどうつけていったらいいかのということが、アメリカやイギリスなどでも問題になっていると聞いています。

ファーナム 女の子は変わった。しかし男の子はあまり変わっていない。その通りです。イギリスでも、ここ15年くらいの中に、女性が能力を磨くことによって男性と肩を並べてきました。男性はこうした現象に脅威を感じていますが、今まであまりにも男性優位社会

であったために、適応力を失ってしまっているようです。つまり、性役割に男性があまりに怠慢であったために、新しい時代の波に適応できないということでしょうか。

田村 今、日本の父親はすごく悩んでいるんです。診察室でみるお父さんたちはまるで裁判で尋問されているような、被告のような立場です。子どもに何かしなければいけない、しかし何もしてこなかったというジレンマに悩んでいるのです。その背景には男性のアイデンティティーがどこからきたかを歴史的に一代代遡って考えなければならないと思います。前の世代、もっとジェンダーロールが明らかだった時期に男性というのは非常に離れ

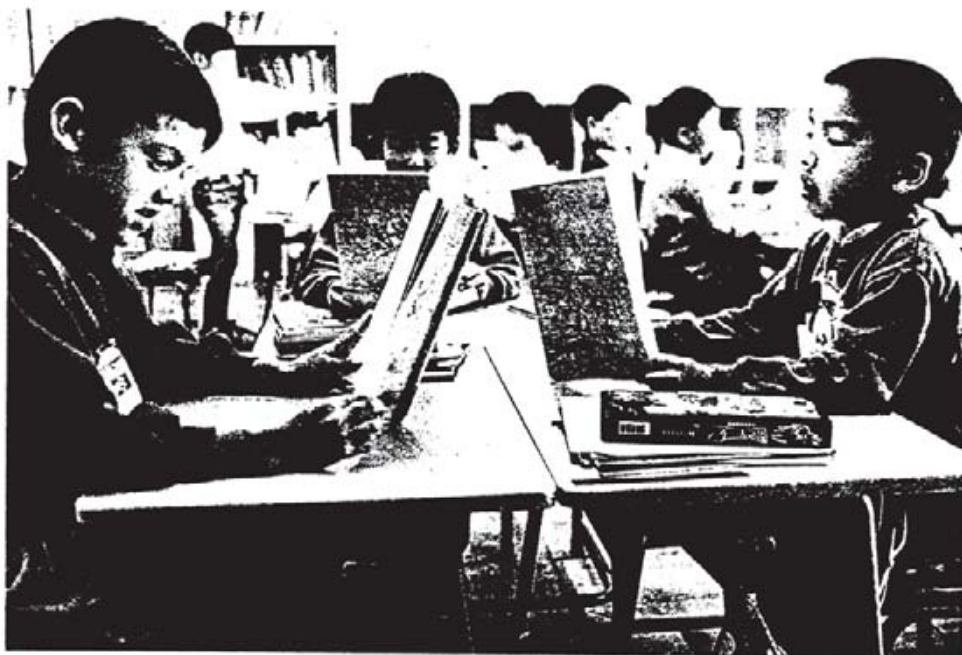
た存在でした。ですから今の父親たちが多く接してきたのは母親です。したがって女性的なアイデンティティーというのは理解できるのですが、男性的なアイデンティティーは理解できないままなのです。理解できるとすれば、遠く離れていて、威張っていてときどきものをいうという程度のものしかありません。ですからジェンダーを考えると、フェミニズムの問題がありますが、それと同等にあるいはそれ以上に、男性がどうしていくかということに興味があります。男性問題がこれからますます深刻になっていくのではないのでしょうか。

## ●気になる日本の子どもの家庭志向))

深谷（和） 私は男女平等とは何かということ先ほどから考えておりました。またジェンダーロールというのは全くないほうがいいのかについても考えておりました。しかし男性と女性がお互いに中性化して、あらゆる領

域で同じに仕事を分担して、あらゆる領域で同等に社会的な仕事の分担率を示せば、それが社会の理想かということ、決してそうではないと思います。

まず、男女がお互いに満足感を持って生き





ていけるかどうかが考えられると思います。その条件としては、1つには、家庭でのつらい仕事を相手の役割だけにしないこと。もう1つは、職業的役割についても男だから、女だからといってできない仕事や地位がないことでしょう。家庭生活は昔は大変でした。ですから家事や育児は「させられる」役割ということだったと思います。ところが状況が変わってきました。子どもは少なくなりましたし、また家族の中だけで育てなくても、学校があれば保育園もあって、他の人たちも育ててくれます。テレビがあれば、本もあります。そして家事も育児も「楽しい仕事」になってきました。

そうなる家庭生活は、ある意味でそれほど損ではなく、むしろ楽しい仕事です。そこでクリエイティブな仕事を、男女がうまく分担しあっていけるという状況が出てきました。しかし、お茶を入れるにはどうしたらいいかわからないというような家庭生活での技術が貧しくてはいけません。先ほどシェークシャフト先生がおっしゃったように、そうした役割が果たせるように、男性にも生活技術や育児の仕方を教えておくことが必要でしょう。ともあれ子どもは何人いるか、何歳か、あるいは仕事の忙しさなどに応じて、あるときは妻が、あるときは夫が家事を分担する。そのような柔軟な対応ができていくことが、無理なジェンダーロールがなくなってきた社会だと思います。

もう1つの職業生活についていえば、すべてが半々、例えば看護婦さんも男女平等で半々の割合というのではなく、女性が望めば総理大臣にもなれるし、男性が望めば看護士にもなれるというように、望んだときに自分の好みの選択ができるという社会こそ望ましいと思います。しかしそのためには、そうした技術を修得する教育機関ができなくてはなりません。つまり教育を受ける権利がしっかり保証されているような社会ができてきて、その上で結果においては、ある職業には男性が多いし、ある職業には女性が多いというバ

ラエティーがあっても、お互いが満足できるでしょう。

ジェンダーロールをどう考えるかはとてもむずかしい問題で、あまり極論してしまうとお互いのセックスアピール、男性、女性としての魅力をも否定してしまうことになるので人生がつまらなくなってしまう。しかしそうしたセックスアピールの問題ではなく、どちらも損しないように生きていける社会をどうつくっていったらいいのかということを考えるべきだと思います。

シェークシャフト アメリカで行ったある調査によりますと、アメリカの母親は洗濯をやってくれないという結果が出ています。しかし私たちの社会においては、親だからといって家事のすべてがパーフェクトにできるわけではありません。ですからシーツをちゃんと敷くとか、皿を洗うということを子どもに教えています。従来はこれは女性がやることだとか、これは男性がやることだということがよくいわれてきました。女性は小学校の先生とか看護婦さんが多い、男性はエンジニアが多いということはありますが、果たして遺伝子的に女性が看護婦に向いていて、男性はエンジニアに向いているのかと考えると、これは社会的に育つ過程で獲得されてきたものではないかと思っています。例えば、家をきれいにするのは遺伝子として女性のほうがすぐれているというものでなく、女性がきれいにするものだというふうに教えられてきたので、女性がきれいにすることが多いということだと思います。

これが1つの限界になっているのではないのでしょうか。例えば、私のように家事をやりたくない女性がいる一方で、男女を問わず家事が大好きな人もいます。女性なので重労働につきたくないという人もいる反面、重い物でもなんなく持ち上げられる力の強い女性だっています。あるいは何よりも料理が好きだという男性がいるかもしれません。しかし子どものときから、男の子だから女の子だからといって、ある役割ばかりを教えられ





てしまっている。つまり性差を超えた役割のチャンスが与えられていないということを指摘することができるでしょう。男女を問わずとにかくやりたいことをやればいいのであって、女性がはたきをかけるのではなく、芝を刈ってもいいわけです。

もちろん家事は好き嫌いにかかわらず、絶対やらなければならないわけですから、やりたくないときはどなたかを雇ってやってもらう。“私ばかりが家事をやるのはいやだ、だから他の人に手伝ってもらう”というのがアメリカでは主流になっています。

マン 私はやはり男女の差は能力的にもあると思います。例えば、通訳はほとんど女性ですね。なぜほとんどの通訳は女性なのか、ある理論にもとづいた証拠をもとに申し上げますが、結論として女性のほうが言語能力が高いということです。実際、学校でも外国語の成績をみてみますと、女の子のほうがいい。しかし、家事に関しては誰が得意ということはないと思います。ですから男女が一緒にやればいいわけですが、仕事に関しては、やはり向き、不向きはあるというのが私の考えです。

シェークシャフト 社会的・文化的な環境でどういうふうに使われるかということで、男女の差が出てくるという研究データもたくさんあります。6歳の子を例にとってみましょう。女の子のほうが口が達者で、男の子の方が立体感覚が強いといわれています。なぜでしょうか。そこで小学校に上がる前までの教育をみてみますと、女の子は生まれてからすぐお母さんがよく話してくれますし、歌を歌ってくれます。ですから、女の子のほうが言語の技術が高まるように訓練されていると思います。女の子と男の子の扱い方が小さい時から違うということです。男の子は外の大きな空間で探検をする。またブロックなどで遊ぶことが多いので立体感が養われてくるということです。ですから、そういう技術が高まっていくのだと思います。

李（光） 文化的な要因、そして遺伝子学的な観点と、この問題は際限なく続く議論だという気がします。

卞 中国では表面上は男女平等です。しかし農村では女性は遅れていますから、これから何百年、あるいは何千年も、男女が一緒になって奮闘していかなければならないと思

ます。それはそれとして、今日、私が勉強になりましたのは、東洋文化の伝統的価値観と西洋のそれは違うということです。また、発展途上国と先進国との違いもあります。したがって見方が違うように思いました。しかしこれからは東洋文化と西洋文化は必ず調和しなければならぬということも強く感じました。児童教育でもしかりだと思えます。

深谷（昌） 最後にジェンダーロールについてもう1つ補足させていただきます。日本の場合、子どもたちに家庭志向がみられるのですが、これは社会的な達成に夢がもてなく

なってきた社会が原因だと思われまゝ。例えば、社長にしても、政治家にしても、ゴールになりえないということです。また、勉強が苦手だとすぐに降りてしまう。こうして降りてしまった子どもたちが、家庭にしがみついているわけです。ですから、本心から自分たちはいい家庭をつくろうという意味での家庭ではないというように思うのです。その点が日本の場合、ちょっと気がかりであるというのが、今回の調査結果を見て私が感じた正直な気持ちです。